

## ●第4分科会●

# パワー全開！新潮流！

～若者が創る新しい地域づくり・

町おこしは凄いぞ！～

### 〔ゲスト〕

はせがわ 祐希

「ドリーム工房☆はせがわ」デザインプロデューサー

「スターリイマン・コミュニティ・プロジェクト」代表

木下 斉

LLP市街地経営研究機構代表

中小機構中心市街地／商業活性化アドバイザー  
一等多数

### 〔コーディネーター〕

濱 博一

石川地域づくり協会コーディネーター

## 1. 難解なテーマ？

はじめに、コーディネーターの濱さんから「分かりにくいテーマの第4分科会によろこそ…」という挨拶からスタート。

パンフの趣旨に聖書の言葉を引用したり「夢を叶える…、地球に愛を…、心豊かな未来を…」というゲストを招待したり、そういえば濱さんの髪も少しずつ寂しくなってきたし、いよいよ宗教の世界に進まれるのでしょうか…？

いやいや、そうではありませんでした。濱さんの幅広い全国ネットワークから、お二人の素敵なゲストをお迎えし、地域づくりには、夢も現実も大切。そして全国には、こんなに頑張っている20代の若者がいるということを紹介していただきました。

まず、濱さんから半紙の左側半分、①第4分

科会を選んだ理由、②過去に夢と現実がぶつかった時にどちらを選んできたか。また、どちらを選ぶべきと思うか。そしてこれからはどうしたいか、③夢は何か、④今、夢に向かって何をしているか。その夢の障害はあるか、⑤その夢は達成できるという確信があるか、を記入し、分科会終了後にどう変化しているかを右側半分、⑥その夢を自己観察してみようということでした。

## 2. ゲストの紹介

### (1) はせがわ祐希さんの活動紹介

- ・「ドリーム工房☆はせがわ」は、画家である父親「はせがわいさお」さん、お話の創作者である母親「はせがわ芳見」さん、両親の作品をデザイン・プロデュースしている「はせがわ祐希」さんの家族3人で、スターリイマンの夢を叶える活動をしている。
- ・スターリイマンが生まれたのは1987年。売れない絵描きだった「はせがわいさお」さんが、娘の祐希さんの3歳の誕生日に何もプレゼントを買えない代わりに、スターリイマンのいる絵をプレゼントしたことがきっかけで、プレゼントを運んでくる人として、作品の中に描かれたのが始まり。
- ・スターリイマンは、地球に愛を、みんなに夢を、命あるものすべてを輝かすために、「夢を叶える9つの風船」(希望・元気・勇気・夢・愛・友情・未来・信頼・幸せ)を世界中に届けている。
- ・2009年、絵画活動30年を迎えた「はせがわいさお」さんは、12月に「絵画活動30年記念展覧会」を開催。この展覧会に向けて、日本の原風景の春夏秋冬を描いた4作品(200号)を通して、日本を誇りに想い、愛する心をつなぐための展覧会や活動を、来年から日本全国で開催する計画。家族で創り上げたコミュニケーションアートを通して日本中、世界中を絆でつなぐ

っかけを作りたい。

- ・活動報告の終わりに『スターリィマンの夢を叶える9つの風船カード』を分科会の参加者に配布。その夢カードには「私の夢は〇〇〇です」「スターリィマンの〇〇の風船で大切な夢を叶えていきます」というメッセージが書かれていました。
- ・福島県では「幸せ」や「愛」の風船を、岐阜県では「希望」や「夢」の風船を選ばれた人が多かったようですが、第4分科会では「友情」や「元気」の風船に人気がありました。



## (2) 木下 斉さんの活動紹介

- ・高校進学の際、通っていた中高一貫の高校には進学せず、別に早稲田大学の付属高校に進学することを選択。高校・大学7年間のうちに受験勉強をしている学生には経験出来ないことを学校の外でやろうと思った。そのまま早稲田大学に進学し、学部では政治学、大学院は転出して一橋大学大学院で経営学を専攻した。
- ・今のようにまちづくりに関わるようになったのは、高校の時に乙武洋匡さんの『五体不満足』を読み、その中で早稲田商店街のことを知り、

訪ねた。ちょうど「早稲田いのちのまちづくり実行委員会」で学生部員を募集していたので参加することになり、毎日15時に高校の授業が終わると、電車に乗って早稲田商店会の事務所に行き、視察やイベント、各種事業の手伝い等を最初はしていた。

- ・その当時、早稲田では空き缶、ペットボトルを回収するエコステーション事業を実施した。ゲーム付き空き缶回収機や当たりくじにギョウザ1皿無料券を配布する等「環境まちづくり」による商店街の活性化を実践した。
- ・これが成功を収め、全国から年350団体以上の視察があり、全国各地100カ所以上にエコステーションが広がり、99年には「全国リサイクル商店街サミット」を開催した。
- ・全国連携して問題を解決しよう、互いに地域同士で学び合おうと「株式会社商店街ネットワーク」の設立に参画し、高校3年生で社長に就任した。
- ・夏休み等長期休暇を利用して、北海道から九州まで全国の商店街を行脚した。
- ・全国には「補助金頼み」「予算消化イベント」ばかりの商店街が多くあり、実際にそれに慣れてしまっている人々は、自分の病理に気づいていないことに気づかされた。それでも「活性化したい」と言う姿に、変革が必要であることを痛感。
- ・補助金を当てにしている商店街には活性化はない。「自分たちのまちをどう守るか、そして何をしているか」という分析が必要。成否は経営力で決まる。
- ・多くの商店街は、自分たちでお金を出し合って何かやろうという意識がなく、受身的である。やることも、やるために必要な費用も全て役所や専門家に依存しようとしている。私は、独自財源を作り、自分たちのまちに本当に必要なことをやろうと提案した。

- ・理想をもって高校に入り、純粋な気持ちで商店街活動を手伝い、夢実現のために現実的なことを積み上げていくことが出来たのは本当に有り難い。出会いに恵まれていた。

### 3. 夢と現実

#### 【コーディネーター 濱 博一】

- ・アメリカの先住民インディアンの言葉で「この大地は先祖から譲り受けたものではなく、子孫から借り受けたものである」という話を紹介。我々はもらった土地だから何をしても良いのではなく、「もっと豊かなものにして子孫に返さなければならない」という意識で地域づくり活動をしなければならない。
- ・今回の異色の2人、夢や理想が大切という「はせがわさん」と、まず自分の現実を見なさいという「木下さん」の話は、一見すると「理想派と現実派」という両極端のように見えるが、逆に共通点が多い。
- ・「理想と現実」を車の両輪に例えると、世の中の変化というカーブでは左右の回転数が合わなくなり、軸が壊れてバラバラになってしまう。実際の自動車では、軸の真ん中にあるハブという装置が両輪間の調整をしている。つまり、活動を前進させるためには、「ぶれないが柔軟に理想と現実を調整できる軸（志・信念・ビジョン）」が重要。

#### 【木下 斉】

- ・自分は徹底的に現実派の参謀というポジションにあるが「ビジョンを持ったリーダーは絶対に必要」。ビジョンといった信念がないと、方向が決まらず事業をカタチにできない。事業を形にする時には困難がつきものであり、それを乗り越えるためには精神力（精神性）が非常に重要である。リーダーには正しい判断以上に、判断して一貫することができる力が必要。それがビジョンである。

- ・コンセンサス重視のまちづくりではなく、まずは小さな成功でも作り上げることが重要。その後であれば、いくらでも賛同者は集まってくる。「まちづくりは勝ち馬に乗せる」こと。
- ・私はどう見ても見込みがない商店街活性化の話は受けない。明確な戦略を立てられる地域のみマネジメントする。これは自分としての責任。最初はこの見極めができず、手当たり次第に取組んだが、徐々に得意な分野や、未熟だが、つけなくてはならない能力というものが見えてきている。
- ・方向性をしっかりして「小さなつぶしがきく事業からやる」。一発逆転しようといった欲を出した事業にかけると、後戻りできない失敗になる。後戻りできる失敗は経験となり、次に必ず繋がる。
- ・「現実的なことは地味なことが多い」。面倒なこと、くだらないことをきちんとやってロードマップを創ることが大事。それがプロジェクトマネジメント。
- ・明確なビジョンをたてる。「まあ何となくお金がつくから」、みたいな感覚で始めると途中で崩壊してしまう。出口のない単発イベントには戦略がなく、当然成果も生まれない。



#### 【はせがわ祐希】

- ・スターリイマンは何でもできるスーパーマンやヒーローでなく、私たちの周りにもスターリイマンのように、気づきのきっかけやあたたかく見守ってくれる人がいる。夢を諦めそうになっ

たり、孤独になったり、苦しいときに「もう一回やり直そうよ」と優しく後押ししてくれたり、「笑顔で頑張ってみよう」と現実の自分にスイッチを入れてくれる。

- ・私が大学3年生の時に両親と一緒に一冊の本を創作したことをきっかけに、両親と共にスターリイマンを通して、人々に生きる幸せや喜びを感じるきっかけを届けていきたいと思った。
- ・具体的な夢や理想が描けないと前進できないし、ただ時間だけが経ってしまう。今後の課題は、想いを実現して継続する為の現実的な経営観念が必要だと思った。
- ・いろいろなプロジェクトには、事業計画や期限などの現実的な問題も多く、追い詰められることもある。期限の視点を変えて、夢を叶える風船を一生かけて届けよう。私の責任でやっぴこうという強い思いを持つことが大事。

#### 4. 若者パワー

##### 【濱 博一】

- ・木下さん27歳、はせがわさん25歳という若者2人のパワーとスピードはすごい。まちづくり10年といわれるが、1年2年スパンで結果を出し、後戻りしない。まちづくりは進化していると感じる。
- ・2人は明確なビジョンと実現できるという確信を持っている。自分たちが20代の時にこんなことを考えていただろうか。迷いながら、あちこち寄り道しながら、年だけを重ねてきた我々とは違い、真っ直ぐに進んできている。
- ・夢への障害は試験、夢に対してどれだけの思いがあるかチェックが入っただけ、諦めるくらいなら本当に自分がやりたかったものではない。別の夢を持てばよい。それでもやりたければ、必ず実現できる。
- ・生意気な若ゾウと言われがちだが、若者が発言しやすい環境をつくってあげることが大切。す

ばらしい若者を見つけたら応援してほしい。夢のない地域に若者は戻ってこない。新しい発想で町の夢を少しでもカタチにしていこう。

#### 5. 質疑応答

Q：まちづくりの商工会議所の役割、関わり方は何か。

A：（木下）基本的に、会議所は利害関係調整機関なので、新たなことを始める時にパワーを吸い取り、基本的に誰かが際だって努力したり、争わせることに反対する。また、工業系は系列親会社の指示があるが、商業系はあまり問題意識を持たないため、改善努力などに関して理解が薄い。理解のある役員や向こうから依頼がある場合以外は、過大な期待はしないようにしている。

Q：お年寄りのまちづくりへの参加のしかたはどうか。

A：（はせがわ）年齢は関係ない。子どもからお年寄りまで役割は多い。みんなであつてこそ、本当のまちづくりと言えるのではないか。例えば、合唱団や読み聞かせ等のみんなの発表の機会をつくる。また、まち全体で子どもたちを育てていくようなコミュニティが形成されると理想的。お年寄りが子育ての大先輩として子どもたちに夢を伝えてくれると、親は安心して仕事をしたり、不安なく子育てができる。

Q：プロジェクトの活動費の捻出方法は？

A：（はせがわ）有志の会の支援、版画・ポストカード等の販売、地域の象徴を描いた絵画の販売等。お金と人のつながりが循環するようなシステムをつくりたい。

Q：子どもたちが自分の活動をどう見ているのか心配。

A：（はせがわ）家族で活動を理解し、夢を共有することが大切。

## 6. 夢を叶える風船

- ・分科会の最後に、はせがわさんから「みんなで手をつないで円陣になりませんか？」と提案。そして、みんなで手をつなぎ輪になって「夢に向かって頑張るぞ〜」「オーッ！」と第4分科会が終了しました。
- ・木下さんの迷いがなく自信に満ちた話には説得力があり、はせがわさんの優しい声と温かい言葉は心に響きました。不思議なエネルギーと優しい気持ちをいただき大満足な分科会でした。

はじめに濱さんから言われた半紙の右側半分は、大きな夢と自信、そして感謝の気持ちでいっぱいになりました。

- ・はせがわファミリーのブログに祐希さんのお母さんが「七尾へ夢を叶える旅が始まる」というタイトルで「娘はスターリイマンになって、七尾の地域づくりシンポジウムで、どんな夢を叶える風船を届けてくれるのでしょうか！」と書かれています。素敵なお話をいただきました。どうもありがとうございます！

### 第4分科会 参加者アンケート【参加者：18 回収：11】

#### ■分科会を選んだ理由

- ・中心市街地活性化に興味あり
- ・はせがわ氏、木下氏とどのような話が展開されるか興味あり
- ・コーディネーターが濱さんだったから
- ・若者の活動を知りたくて
- ・自分がやっていることに近かった
- ・知人の紹介
- ・時間の都合と知り合いだったから
- ・商店街まちづくりに興味があったため
- ・夢、愛、願いなどの理想論と金、物、商などの現実論がどう結びつくのか知りたかった

#### ■分科会はいかがでしたか？

- ・まちづくりにおける理想と現実の大切さ、そして預かった大地をどう子孫につなげるかを考えるよい機会となった
- ・自分の課題にドンピシャだった
- ・想像以上の内容に満足
- ・大変満足。理想も現実も両方大切。苦しい時こそ笑顔で！家族の理解、応援も大切
- ・すごく良かった、もっと聞きたかった
- ・大変面白かった、特に木下氏の話が良かった
- ・おもしろかった
- ・話が難しく何を言いたいかわからなかった
- ・若いゲスト二人が大変素晴らしかった。夢と現実（天使と悪魔）に挟まれつつ今後も頑張っていこうと思えた
- ・若者パワー、中高年層のパワーを活かし、地域の中でどうチャレンジできる環境づくりをするか参考にする
- ・非常にためになった
- ・はせがわさん木下さんに人生の生き方を勉強させられた。地域のスターづくりの環境づくりに努力したいと思う

